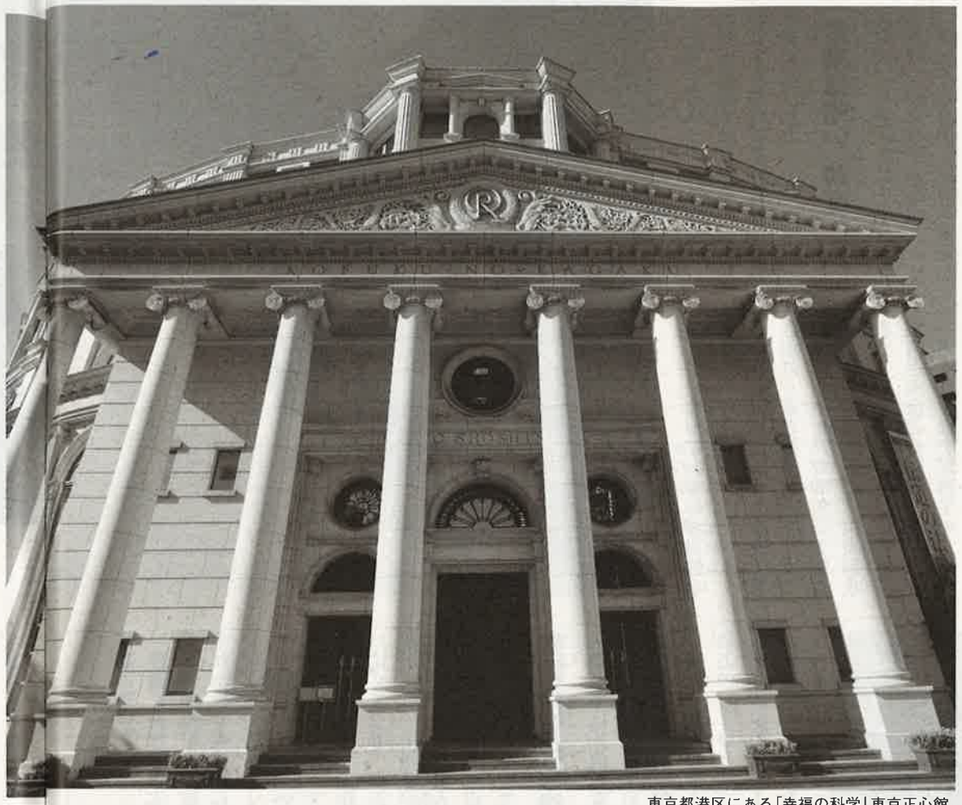
女優・清水富美加の引退で注目される「幸福の科学」

仕事と信仰両立できず

人気女優・清水富美加(22)の突然の「引退」表明と、幸福の科学への〝出家〟騒動。「信仰と仕事の両立が当たり前」という芸能界に衝撃が走った。



東京都港区にある「幸福の科学」東京正心館。ギリシャ様式の柱が並ぶ建物で、異彩を放つ

「お仕事の内容に心がおいつかない部分があり、しっかりとした生活が送れず、毎日がギリギリの状態でした。なので今、出家したいと思いました」

2月12日のスポーツ紙などで清水富美加の「引退」が一斉に報じられると、宗教団体「幸福の科学」を通じて直筆メッセージが公表された。

2015年、NHK連続テレビ小説「まれ」で、主人公の友人役を演じてブレーク。今春、「暗黒女子」「笑う招き猫」と主演映画が相次いで公開される矢先のこと。ドラマ、映画、バラエティー、CMで活躍する新進女優の出家宣言に、メディアは追いかけた。法名「千眼美子(せんがんよしこ)」を名乗り、清水本人が開設したツイッターのフォロワー数は39万強(2月17日現在)に。ネットでも清水への関心が急速に高まっている。所属事務所レプロエンタテインメントの関係者は、驚きを隠さない。

「清水が幸福の科学に入信していたのは事務所としても青天の霹靂(へきれき)。天然だけど、頭の回転が速くてやる気のある子だという印象だったのに」

芸能界の労務問題にも

同事務所には、NHKの連続テレビ小説「あまちゃん」で一躍人気となった能年玲奈(現・のん)も所属。能年の独立をめぐって事務所とトラブルになる騒動もあった。

清水が「月給5万円で、ボーナスも支給されなかった」と明らかにしたため、信仰の問題とは別に、芸能界の労務問題にも発展している。

「月5万円しかあげていないというのはちょっと違う。NHKの朝ドラが決まると安定した生活のために月給制になることが多い」

所属事務所の関係者は、そう反論する。

幸福の科学広報局は、清水の出家についてウェブサイトで説明。清水が熱心な信者で、子どもの頃から宗教行事に参加してきたことを明かしたうえで、清水の胸中をこう代弁した。

「最近は、人肉を食べる人種の役柄など、良心や思想信条にかなわない仕事が増え、断ると所属事務所から干されてしまう恐怖心との葛藤のなかに置かれていました」

同教団は清水の「守護霊」を呼び出し、2月3日に『女優清水富美加の可能性 守護霊インタビュー』(幸福の科学出版)を刊行したばかり。

清水本人もツイッターで、『全部、言っちゃうね。』という告白本を17日に緊急発売すると電撃ツイートした。清水側の動きの速さが目立つ。

朝ドラヒロインの期待

中堅芸能事務所のマネジャーは、こう話した。

「『そのうち朝ドラヒロインになる』と噂されていたくらい、NHK受けもよい女優だったから残念。芸能界には、宗教団体に所属している情報が公になれば動きにくいタレントも少なくない。だから信仰と仕事の両立は当たり前なのに、出家というのは不思議な話に感じます」

宗教取材班

芸能界や教団内部から聞こえる意外な反応

なぜ在家でダメなのか

世俗を離れ、家庭生活を捨て仏門に入る――。出家とはそういう定義になるが、伝統教団なら剃髪(ていはつ)し、厳しい戒律(具足戒)を待ち、ようやく資格を得る。

ところが、清水富美加と幸福の科学にあてはめると、事情は大いに違う。そうでなくとも、単に教団へ奉職しただけなのに、

「今回、○月○日付で出家したアエラ花子です」

というような信者のあいさつやマニフェストを聞かされてきた筆者は、この教団の出家なるものへの違和感がある。加えて、お布施や寄付を行っていた幸福の科学信者が、それを給与なりの形でいただくだけの変化ではないかと突っ込みを入れたくなる。

問題は芸能人の「利用法」である。これまで同教団には、連ドラをこなしたり、映画のヒット作に登場したりするような女優が皆無だった。ここが、信仰の有無を問わず著名な文化人、大物タレントが機関紙に多数登場する創価学会との決定的な違いだ。知己のタレント事務所関係者は、こう声をそろえる。

「なぜこれまでの在家信者ではダメなのか、理解できない。せっかく大手企業の広告に起用され、映画出演でも順調だった清水を出家させてしまったら、教団の広告塔になどなりませんよ。幸福の科学が芸能界への向き合い方を知っているとは思えない」

女優の清水富美加。演技も評判で、笑顔が印象的

宗教映画の難しさ

たしかに信者の女優・小川知子などの場合、確固たるステータスを築いてからのカミングアウトであり、そもそも出家などを選択していない。また清水が仕事内容や事務所からの扱いで、不満以上に恐怖感さえ持っていたとすれば、出家は逆効果を生む可能性がある。

というのもこの教団は、〝入るに易しく、やめるに困難〟なことで評判なのである。退会するにあたっては、教団職員との面談が必要で、所定用紙でなければ受け付けてもらえない。やめたいと感じる会員をおじけさせるのに十分だ。

さらに、幸福の科学や、その信者に対し、迷惑行為や和合僧破壊行為(信者の信仰を揺さぶったり、失わせたりする行為)をすることはありません――なる誓約書が求められる。会社を辞めるのとわけが違うし、このような誓約書を書かせる教団など、まずお目にかからない。出家者ならなおさらで、還俗(げんぞく)はよりハードルが高いのである。

そんな事情を清水が知っていたかはわからないが、仮に教団の言う「宗教映画」へ登場するにしても、コアなファンで上映会場が埋まるものだろうか。そして教勢拡大につながるものだろうか。教団のもくろみがそこにあるとすれば、これは相当に甘いのではないか。

実際、幸福の科学は多くの映画を企画し、海外でも上映されてきた。特に創価学会の池田大作名誉会長らしき人物が〝悪役教団トップ〟で登場する「仏陀再誕」(アニメ映画)など話題になったものはある。

「そんな読みは甘い」

と、語るのは映画記者。

「新宗教の宗教映画でヒット作はありません。例外は多数の信者を観客動員した、創価学会の『人間革命』くらいです。それも昔の話ですしね……」

一方、教団内部からは意外な声が聞こえてくる。

「総裁のお目にかかれば、法名もいただけるし、出家者になれるというなら、われわれが地道にやっている在家の研修はいったい何なのでしょう。寄付は熱心に呼びかけられますが、出家者になること自体を教団は勧めません」

最も違和感を与えるのが、契約や仕事(小善)より教義を遵守すること(大善)という教団の理屈だ。およそ宗教で利他を説かない宗派はないが、日本国憲法でうたわれる「自由」のうち、「信仰(信教)の自由」を最上位に位置づけるのが幸福の科学の特徴である。つまり他の自由は、それに〝従属〟する宗旨なのだ。よって今後、清水や教団の主張、行動を批判した場合、場違いな「信教の自由」が振りかざされる可能性がある。

ジャーナリスト 山田直樹